

おかあさんの
骨をもらって歩けた

ポイントブックをお読みになった方へ

文化と教養と実生活にプラスし、知識のエッセンスを読者に提供することを目的としたポイントブックは、つねにあなたへの“よき奉仕者”であることを念願しております。あなたは、この本のなかのポイントを十分に生かして、現代の知性と教養をいっそう高められたことと信じます。あなたの「読後感想」(職業・年齢付記)をポイントブック編集部あてお寄せください。

著者 今野喜美子

1923年仙台生まれ。

旧制高女卒。銀行・会社に勤め、昭和21年結婚、二児の母となる。現在は夫の運動資金を獲得するためD公社にパートタイマーとして勤務。

おかあさんの骨をもらって歩けた

昭和36年5月25日初版発行

定価 250 円

著者◎ 今 野 喜 美 子

発行者 大 島 秀 一

印刷者 株式会社 堀内印刷所

東京都千代田区神田三崎町 2-16



発行所 東京都千代田区二番町二

振替東京15844・電話(332)6658

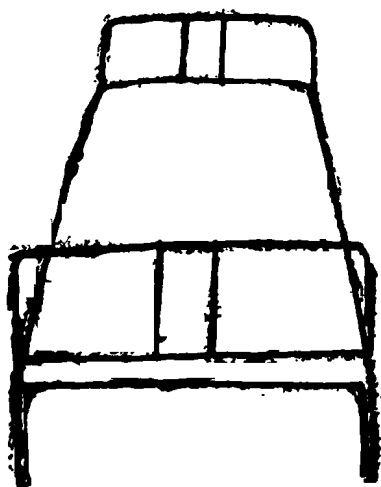
番 町 書 房

落丁・乱丁本はお取りかえします。 Printed in Japan <製本・田中製本>

おかあさんの 骨をもらって歩けた

わが子へ腰骨を削りあたえた母の手記

今野喜美子 著



番 町 書 房

目次

“県民の母”に選ばれて	五
とび魚の名にあやかる	七
悪魔が日曜日に	三
病院をめぐりめぐって	七
愛のベッド・スクール	全
マーちゃん、がんばって	二三
空文にひとしい児童憲章	二六

手術はつづいたが 一四〇

そのカタハネ予算を！ 一六三

この骨をわが子へ 一八五

行く末を悩むこどもたち 二六

悲願十年 二四二

“県民の母”に選ばれて

昭和三十六年五月十四日。風薫る五月晴れの朝でした。夫は国立西多賀の療養所へ、ひと足さきにこどもの正広を迎えに行きました。

女には、その日の気分によって、お化粧のでき、ふできがあるといわれていますが、わたしは、この朝は、ためらいを感じながら鏡に向かっておりました。

きょう、仙台市の公会堂で開かれる「宮城県母の日大会」の席上で、わたしを「県民の母」第一号として推薦してくださるというのです。数日前、その内報があったとき、わたしはびっくりしました。おもはゆいと思いました。

「カリエスの子とともに闘病十年、病めるわが子の再起を願って、腰の骨をけずりとり、子に与えた母親。」

カリエスの子らの幸福を願って東奔西走している夫をたすけた妻」

として選ばれたのです。夫とわたしは、その内報を前にして、黙ってすわっておりまして。お互い、なにか話し合いたいのに、言葉が見つからないような気持ちでした。言葉もなく黙っ



“県民の母” 第一号に選ばれて
花束を受ける

ですわっている夫婦——それが、わたしたちの気持ち、むしろ、はっきりとあらわしているようなものでした。

しばらくして、夫は、つぶやくようにいいました。

「最愛の子をあんな姿にしてしまった母親が、人の前で讃えられる資格などない。あたりまえのことをしてているんだし、これからも、いままでどおり、カリエスの子たちのために尽くしていれば、それでよいのさ。推薦していただくのは願ひさ

げにしてもらおう」

しかし、わたしの尊敬する、宮城県庁母子課におられて母と子の問題に情熱をささげられている鈴木道太先生からも、

「同じような立場にあるこどもたちをもった母親の代表として、どうか受けてください」

と熱心なすすめがありました。

謙譲は自慢に勝るといふ諺どおりで、あまりに辞退することは、かえって見苦しいことかも知

しれない。すなおにお受けすべきかもしれない。そう考えなおして、わたしは讃母式さんぼしきに臨むことにきめました。

ところが、まさしく世の中はさまざまです。そのことを痛感させられ、夫とともにまた黙りこくったままで考え合ったこともあります。

若いある評論家が、わたしのやった「行為」を、ある新聞で評しておられました。

——母親がわが子のために自分の骨をけずりとして移植したということは、美しいことにはちがいないが、正直に言って、およそ現代的ではない。現代の親子関係は、もっと合理性があつてしかるべきではないか。もっと医学にたよって、上質の骨を他から求めることもできるはずである。もし、母親が骨をけずりとしてしまったことで、母親のからだまでこわれてしまったらどうなるか。そうすることが、子への愛になるだろうか。昔ながらの浪曲的なにおいがないではない。

というような意味のことでした。

その後、その評論家が文芸講演のため当地にお見えになったことがありました。夫とわたしは、その講演を拝聴するつもりで出かけるしたくをしました。ところが、どちらからともなく、着替える気分がうせてしまい、

「しょうがないよ、やめようか」

「そうね。会ってみたところで、という気がするわ」

ということになりました。夫とわたしは顔を見合わせ、寂しく微笑しました。夫のその顔には、けっきょく、ぼくとおまえだけなんだ、力をあわせてぼくらだけであたため合っていればいいんだ、という目が光ってありました。

わたしたちは、講演会へ行き、できるならば控室へお伺いして、いまをときめくその若い評論家にあいさつするつもりでおりました。「いつか新聞で評していただいたのは、このわたくしでございます」とお礼を述べるつもりでした。しかし、そうすることは、ほんとうではない。浪曲的といわれた口惜しさを腹のなかに隠しもっていることになる。——そう反省して、どちらからともなく出かけることをやめてしまったのでした。

わたしのやった「行為」を讃えてくださるかたもある。それは合理的ではないと評してくださるかたもある。世の中はさまざまなのだ。それが当然なのだ。べつに事新しいことではない。——けっきょく、他人のやったことはなんとでもいえるのであって、その「行為」については、自分だけが、自分たち夫婦だけが知っておけばよいのだ、と思わずにはいられませんでした。

ですから、推薦されることもおもはゆくてなりませんでした。自分自身に納得させたかっただけの「行為」なのですから、おほめにあずかるいわれはないのです。夫がいつてくれたように、これからも黙ってやっていたらいいことなんだと思っています。

でも、きょうは「県民の母」第一号としてくださるのなら、わたしはありがたみなさんの拍手をお受けしよう。鏡のなかの自分に向かって、わたしは、いくどもいくども、いいきかせ

ておりました。

帯を締めるだんになって、自分のうしろ姿を鏡に映しました。すると、腰のあたりから左のおしりにかけて、板を入れたように平たくなったような感じがしました。腰の骨をけずりつつためです。わたしは、ごくあたりまえのように手のひらでおさえ、なんでもないことなんだと思いました。わたし、少しやせたのかしら、といっっては、よく女のひとは鏡に映った自分のおしりなどをおさえてみるものです。いまのわたしも、ただそんなあたりまえなつもりでおさえてみたにすぎませんでした……。

会場は胸に赤いカーネーションをつけた主婦たちで埋まっておりました。会場正面の壇上にしつらえた席につきますと、みんなの視線がわたしのおしりに集まっているのではないかという気がしました。

「ほんとに、たいしたことではなかったんです。そんなに見ないでください。わたくしを恥ずかしがらせないでください」

わたしは心で叫びながら、うつむいておりました。重村副知事さんや島野仙台市長さんのおほめの言葉も、なかば上の空でした。かわいいぼっちゃんとお嬢ちゃんから贈られた花束を、ふるえる手でちょうだいし、胸にいただき、胸が高鳴るのをおぼえながら、わたしはお礼の言葉を述べました。

「みなさんの前で、このようなきれいな花束をいただき、県民の母として讃えられたわたくし

は、その光栄にただただ感激いたしております。

母として、妻として、なすべきことを当然果たしたにすぎないわたくしでございます。わたくしの骨が、わたくしの命が、カリエスのわが子正広の体内で、骨となり命となってスクスクと伸びてゆくことを願ってやったまでのことでございます。

また、カリエスの子らのしあわせのため、日夜かけずりまわっている夫を助けたことは、妻としてのわたくしの当然のお手伝いでした。ここにお集まりのおかあさんがたのなかには、同じような体験をなされたかたがたたくさんおられることと思います。きょうのこの感激、そしてこのみごとな花束を、わたくしはそのおかあさんがたと分け合いたいと思います。

みなさんのお励ましにより、こんごも、わたくしのこどもを含めた多くのこどもたちの幸福のため、夫を助け、強い母となって進むことをお誓いして、お礼のごあいさついたします」

どよめくような拍手を浴びました。まるで潮騒しおさけのようにわたしの胸に響いてきました。そして、それは、この十年間のたたかいを、まざまざと思い出させてくれるかのように迫ってきました。

そのとき、司会をしていたかわいいお嬢ちゃんが、

「おかあさん、むこうをごらんください。あそこに正広ちゃんが……」

と、会場の後方を指さしてくださいました。

スポットライトがいっせいに、会場後方のいちだんと高い席を照らしました。

ああ、そこに、夫に付き添われた正広が、車椅子にすわって、まるまる太った顔をほころばせている。わが子正広が、さかんにこちらへ手を振っているではありませんか。かたわらに立った長女のまき子とともに。

友人の須藤太吉君をはじめ、何人かのお友だちがそばに並んでいるのもわかりました。

一瞬しずまりかえった会場に、ふたたび嵐のような拍手が鳴り響きました。嵐のなかの壇上で、ほおをつたわり落ちる涙もふかずに、わたしは立ちすくんでおりました。手をうち振るわが子にこたえたいわたしの脳裡に、この子と歩んだ過ぎし十年のことどもが、かすめてゆきましました。

式のあと、公会堂の玄関で待っていてくれた正広たちのそばに駆け寄ったわたしは、正広とまき子の手を堅く握りしめるだけで、言葉もありませんでした。めがねの奥の目をしばたたきながら、主人も、

「おかあさん、ご苦労さん。ありがとう」と、ただひとこと。

わたしは、さきほどいただいた花束から白いカーネーションを一輪抜き取って、かれの背広の胸につけてやりました。そして、わたしは、ふたたび熱いものが噴きあがってきそうになるのをおさえるように、頭をたれました。

カリエスのわが子を通じ、同じ病に悩んでいるこどもたちとその親のために、ながい歲月、コツコツと努力してきてくれた夫への、最高の勲章として、わたしは深い感謝をこめたつもりでした。

「妻から勲章をもらった夫なんて、おそらく世界のどこの国でもなかったことかもしれないね。おとうさんは光栄ある男性だよ」

夫は、そういつて笑いににぎしました。しかし、その目には涙が光っておりました。

「さあ、正広ちゃんもまき子ちゃんも、おとうさんに拍手を送ってあげてちょうだい」

わたしが、ふたりのこどもをふりかえりますと、正広の両眼にキラキラと涙がかがやいており、まき子は顔を隠すように足もとばかり見ておりました。

わたしたち一家は、だれいうとなく正広の車椅子を取り囲むようにして押しながら、歩きだしました。夫の手、わたしの手、まき子の手が車の握りをつかんでいます。思えば、久しぶりの親子四人がそろっての外出です。

夫もまき子も、正広も、それぞれそうつぶやいていたにちがいありません。なんとなく、空を仰いで歩くような姿勢になっています。涙をぬぐったほおを、五月の風がこころよくなでてくれました。

そのとき、ひとりのおばあさんが追っかけるようにしてきて、わたしのかたわらへ寄ってきました。

「奥さん、花束を受けられるときは、いちだんとおきれいでしたよ。ほんとうにご苦労さまでしたね。これからもがんばってくださいまし」

やさしく声をかけてくださり、わたしの手に、折りたたんだ白い紙をそっと手渡してゆかれました。わたしは、ほめられたことのように恥ずかしくなり、夫を見ました。そして、なんて書いてあるのだろうと思って、折りたたんだのをひらいてみますと、チリ紙に千円札が一枚包んであったのです。

「あつ、これはいけないわ」

わたしは車椅子から離れて、そのおばあさんを追いました。しかし、会場から出てくる人たちのなかにまぎれこんでしまい、見失ってしまったのです。

「おめでとう」

「だれかをおさがしですか？」

みんながわたしの顔を見て、あらためて声をかけてくれます。わたしは、あいさつもそこそこにして、車椅子のところへもどってきました。

「病と闘うこどもたちに贈り物していただいたんだ。ありがたうお受けしようじゃないか」
夫はそういいました。わたしもむろん、そうさせていただくつもりでした。

母となり、喜びと悲しみの幾歳月。いまは「県民の母」として推薦され、いろいろの励ましの言葉も各地のかたがたからいただき、身にあまる光栄に浴したわたし。そしてまた、いまは

見知らぬおばあさんのあたたかな贈り物。世の人の善意を、きょうほどうしみじみと身に感じたことはありませんでした。

「わが子のためだけでなく、カリエスを病むこどもたちのため、不幸な谷間にいるこどもたちのため、夫とともにさらに強く進むのだ」

わたしは、そう自分に語りかけずにはいられませんでした。車椅子を押す手に力がこもりま

す。
会場前の広場に出ると、同じ病の子をもつかあさんがた、先生がた、こどもたちが待っていてくださいました。みんなで緑の芝生に腰をおろし、春の陽を浴びながら、主人が用意してくてくれた弁当を食べました。そのおいしかったこと。ほんとうに十年来、味わったことのないままでした。

正広もまき子も、太吉君たちも、みんなにこにこしながら、ほおばっていました。

「あなた、思い出さない？」

大きなおにぎりをつまんでいる夫に、そとときいてみました。

「う？」

という表情で、夫は見かえりました。しかし、すぐに通じたのか、うなずきうなずきしてくれたのです。

「あれ、何年まえになるかしら？」

ときいてみたいような、それでいて、まだきのうのこのように思われてならないことなのです。

正広がやっと歩きはじめたところですから、もう十一年まえのことになります。親子四人でここに、この芝生のこの場所に、ピクニックにきたことがありました。元氣だった正広は芝生の上を歩いたりころんだり、はしゃぎまわったものです。

そういえば、夫もわたしもまだ若うございました。夫は正広をブランコにのせ、わたしもいっしょに砂場にはいって、こどものようにスカートをよごしてしまいました。夫は、「いいか、見てろよ」と得意になって鉄棒をして見せたものでした。

ほんとうにまだきのうのような気がします。あれからの十一年間の苦闘は、時間の流れは、わたしたちから消え去っていつてしまったようです。現在のわたしたちの幸福は、十一年まえの幸福にそのまま直結しているみたいでなりませんでした。

正広は車椅子の上で友だちと話し合ったり、ノリ巻をパクつくのに忙しい。まき子は写真機を使えるようになったのでうれしそう。夫は——かれは、ひとり思い出し笑いしながら、うまそうにたばこをくゆらせています。

この一見平凡な風景。一家が芝生の上で春の陽^ひを楽しんでいる光景。わたしたちが夢みてきたのは、たったこれだけのもの。これが、わたしたち一家にとっては高価な、かけがえのない